

第45回高知女子大学看護学会 ワークショップ

ワークショップ1：

人生百年時代に向けての仕組みづくりー 多職種協働

【コーディネーター】

黒 岩 幸 枝

(高知市保育幼稚園課)

【企画の意図】

健康は、自分の自助努力だけでなく個人を取り巻く様々な環境「社会的決定要因」を考慮する必要がある。人々が地域で自分らしく暮らすことを支える地域づくり、人々の主体的な選択を支援する仕組みづくりなどについて、行政・福祉・看護など様々な立場から意見交換し考えていきたい。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

野 口 裕 子 氏

(高知県中央西福祉保健所健康障害課、保健師)

ご自身の経歴と現在の職務内容から多職種協働について発表いただいた。厚労省健康局長通知「地域における保健師の保健活動について」を引用され、みる・つなぐ・動かすことが必要であり、支援する側も孤立しない仕組みづくりを心掛けていると話された。

三 橋 沢 実 氏

(高知市高齢者支援課 東部地域高齢者支援センター、社会福祉士)

社会福祉法改正の概要等の紹介を交え、日々の業務から感じている、課を超えて協働することの難しさを語っていただいた。一方で、できることから活動し、住民が安心感を持てるように寄り添うこと、成功体験と達成感を感じる仕掛けづくりを心がけて活動していると話された。

【ディスカッション内容】

参加者は様々な立場から多職種協働を経験されており、それぞれに感じる困難感を共有した。民間や公立の立場の違いや、病院というピンポイントでのかかわりの場合、行政の広く一般市民対象の場合など、立場や関わる場面が違えば、課題の感じ方やアプローチの優先順位が違ってくることがあることを確認した。その違いに気づけなかったり、理解しあえなかったり、目標

を共有できなかった場合に、他職種協働はうまく機能しないため、それぞれ専門職同士、違いがあることを理解し合い、目標を共有でき、成功事例を共有することができればよいのではないかと意見交換された。

また、住民との協働の場合は、案を温めつつ諦めずチャンスを探し、個別支援を通じてチャンスをつかむことが大切だと語られた。

ワークショップ2：

人生百年時代 老年期の多様な生き方を 支える

【コーディネーター】

野 村 裕 子

(介護老人保健施設リゾートヒルやわらぎ
30期生 修士10期生)

【企画の意図】

高齢者の多様な生き方を支える取り組みとして、厚労省は多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援、地域社会への参画促進、尊厳の保持、自己実現といった4つの課題を設定している。これらの取り組みや捉えている課題など、今高齢者保健医療の現場で起きていることをみつめなおし、未来について考えた。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

小 菅 樹 里 氏

(高知市高齢者支援課 47期生)

南部地域高齢者支援センターの保健師として、介護保険や複雑化・多様化したニーズを持つ高齢者等の相談支援業務の要となり御活躍されている。地域住民を巻き込み生活を立て直しされたゴミ屋敷や認知症の事例紹介や、いきいき百歳体操の場を広げ、元気な高齢者とともに地域づくりに取り組まれた活動について語られた。

森 下 幸 子 氏

(高知県立大学健康長寿センター 特任教授)

高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の教育担当者として、病気になっても最期まで住み慣れた家で暮らすことを支える訪問看護師の育成に御尽力されている。高齢多死社会を背景に高齢者の尊厳を守り、在宅でのACP（アドバンス・ケア・プランニング）の課題について語られた。

【ディスカッション内容】

急性期病院や慢性期病院の看護管理者、大学や専門学校での教員、大学院生など医療や教育の現場で実践者として活動されている方々が参加された。住民主体の地域づくりでは住民力を信じ待つことの勇気を持ち、待つ間にも地域のキーパーソンに関わりタイミングをはかって介入していく細やかな実践方法を共有した。地域づくりは高齢者同士のつながりが強化され、それぞれの役割が発揮でき支え合う場、高齢者の課題解決の場に発展していくことを実感できた。地域の問題を高齢福祉課内のみでなく他部署と協働し地域共生社会を目指していくことの重要性を認識できた。高齢者のACPを支えることは高齢者が人生の最期をどう往きたいか、関心を持って対話し思いを聞きだし、その人らしさや価値観を知ることが重要であり、そのプロセスにおいて看護職の持つ看護の力を発揮することができ大切な役割を持つことを確認できた。また新卒訪問看護師を育成するうえで感情労働に対応する必要性など、まさに多様な視点から様々な意見交換ができたワークショップとなった。

ワークショップ3： 病と共に生きる百年

【コーディネーター】

高 樽 由 美

（高知県立大学看護学部 修士9期生）

【企画の意図】

医療技術の進歩により慢性疾患をもちながら生活する人が増加してきている現在において、人生100年時代を見据えた慢性疾患合併症の2次予防対策がきわめて重要な課題となっている。病院・在宅における現状の課題の共有とともに、今後の取り組み、支援について考える。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

益 宏 実

（高知県立大学看護学部 43期生 修士9期生）

「通過点」の中でその人らしく生活するために病棟看護師ができること、というテーマで地域包括ケア病棟での経験をもとに退院調整についての課題、取り組みについて、実際の事例をまじえながらご紹介していただいた。

安 岡 しずか

（高知中央訪問看護ステーション 高知中央

居宅介護支援事業所 高知中央相談支援事業所 統括管理者 修士14期生）

高知県における訪問看護の現状と課題をふまえながら、事例を示しながら訪問看護師、在宅看護専門看護師としての役割、実際の“いのちと暮らしを守る支援”などについて、ご紹介していただいた。

【ディスカッション内容】

参加者より、高度な臨床判断や技術を提供するうえで、訪問看護師の技術をどのように担保しているのか質問があり、臨床判断の難しさや、訪問看護ステーション自体が脆弱なところも多い現状や、研修に参加するなどして研鑽を重ねていくことの必要性について意見交換された。

また、多様化する利用者のニーズに対して、地域との関係性を大事にしながら、それぞれの利用者に応じた動きやすいシステム作りを行っていることなど工夫をされていることを、事例をまじえながら紹介していただいた。

臨床で働く看護職から、行った退院調整が効果的であったのかどうか気がかりである、といった意見があり、退院前訪問など活用できる制度を取り入れてほしいことや、病院側が把握していない制度があることなどが共通認識され、連携の必要性について再確認された。

ワークショップ4： 人生百年時代を担う子どもの力

【コーディネーター】

高 谷 恭 子

（高知県立大学看護学部 45期生）

【企画の意図】

子どもを取り巻く環境は、健康格差や地域におけるつながりの希薄さ、核家族による子育ての孤立化など厳しい状況にある。その中で、様々な健康レベルにある子どもが健やかに成長発達し生きる力を培うための、地域－医療－教育が連携・協働した子どもや家族への支援について考える。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

源 田 美 香 氏

（高知県立大学健康長寿センター 家族支援専門看護師 修士17期生）

NICUから長期入院を経て在宅療養を必要とす

る子どもの特徴や家族の療養体験をもとに、家族が医療的ケアをも含めた子どもの育ちを楽しみながら、子どもと家族が成長発達していく支援活動の実際について、出生後から就学前に焦点を当てて話題提供いただいた。

中 野 靖 子 氏

(高知学園短期大学 修士20期生)

発達障害をもつ子どもを支える学校・医療・専門機関等との連携における養護教諭のわざや海外の教育システムの紹介を通して、家族とともに子どもの自立を支えながら、地域で子どもを育てる専門職者間の継続した支援について、就学からその先を見据えた話題提供をいただいた。

【ディスカッション内容】

退院や継続支援に関わる看護師、養護教諭、助産師といった子どもを取り巻く参加者の様々な立場から、子どもと家族の現状や課題の共有を行い、職種がもつ専門性を活かした支援のあり様についてディスカッションを行った。その結果、子どもと家族に継続した支援を提供できる多職種であることを強みとして、子どもと家族がもつ力を育み、見守り、発揮できる環境を整える連携・協働の重要性が語られた。また、その実現に向けて、専門的な知力や技術力を研鑽するとともに、子どもと家族がより良く暮らすことを支える専門職者として自らつながり、互いにつなげる力の発揮・強化を考えることができた。

ワークショップ5：

人生百年時代のライフキャリア

【コーディネーター】

原 田 千 枝

(高知大学医学部附属病院 39期生 修士9期生)

【企画の意図】

キャリアとは自らの社会での存在意義のことです。あなたは、将来のキャリアに向けて、もうギアチェンジをしていますか。このワークショップではいろいろな視点から、長くなった人生をどう生きていくのか、ライフキャリアについて考えていきたいと思います。

【話題提供者の紹介及び話題提供の概要】

松 森 美 和 氏

(土佐病院 修士19期生)

ご自身のキャリアの転帰になったイベントについてご紹介いただき、その時々でどう意思決定をしたのか、お話いただいた。また、大学院への進学で、多くの刺激を得たと話され、キャリアを考える際には、ビジョンを持つこと、自分のやりたいことと社会の需要を鑑みて、決定することの大切さについて語られた。

岩 崎 美 幸 氏

(高知医療センター 修士20期生)

「50歳からのキャリアを考える」というテーマで、ご自身の今後のキャリアについて「希望」「体力」「知識・技術」など複数の観点からお話いただいた。また50歳での転職のポイントについて情報提供され、その上でキャリアの着地点をどこにするか、またそのため準備についてご紹介いただいた。

【ディスカッション内容】

それぞれの参加者から、これからのキャリアについてどのように考えているのか、語っていただきながら、ディスカッションを行った。参加者からはこれからのキャリアについて「必要とされる場で働きたい」「実践し続けたい」と意向が示された。そのために「自分の可能性を信じる」「自分で枠を作らない」「自らアンテナを張ってみつける」ことが必要であると意見があった。また「人脈を広げる」「ビジョンを持ち、流れに乗る」ことの重要性についても多くの意見があった。また日頃から、管理者とライフキャリアについて話し合うことが重要であり、管理者の役割として、「スタッフのライフキャリアへの支援」も上げられると意見があった。

ワークショップ6：

人生百年時代 新しいアプローチの開発

【コーディネーター】

加 藤 昭 尚

(高知大学医学部附属病院 修士15期生)

【企画の意図】

高知では、福祉においてノーリフトが浸透してきている。その取り組みや、ノーリフト先進国オーストラリアの取り組みの実際を聞き、新しいアプローチの開発と実践への活用について

ディスカッションしたいと考えた。

【話題提供者の紹介及び話題提供内容の概要】

下 元 佳 子 氏

（一般社団法人ナチュラルハートフルケア
ネットワーク代表理事）

下元氏は、高知県のノーリフト普及をリードされている。高知県がノーリフトに取り組んだ背景や、施設でノーリフト導入時に必要なリスクマネジメントの手法、ノーリフトによって得られた効果などについて紹介された。

寺 尾 香 里 氏

（高知県立大学看護学研究科博士前期課程）

寺尾氏は、オーストラリアで看護学を学んだ経験を持つ。自身の経験から、基礎教育におけるノーリフトケアの位置づけ、ノーリフティングケアの法的根拠、ノーリフトポリシーについて紹介された。

【ディスカッション内容】

大学教員や大学院生、病院勤務の看護師等の参加があった。中でも、ノーリフトケアの導入に取り組んでいる施設から多くの参加者が見られた。

参加者からは、オーストラリアでノーリフトケアが導入された経緯やノーリフトケアを導入する上での障害となるもの・進め方（PDCA、リスクマネジメントの考え方）について質問があった。その後のディスカッションでは、ノーリフトケアの導入について多くの意見が交わされた。話題提供者からは、まず腰痛調査から始めることや、新しいことを始めるときは、重症や障害の重い方から始めるのではなく、取り組みやすい方から始めるようアドバイスがあった。

参加者は、終始真剣な様子で話題提供者の話に耳を傾けており、活発なディスカッションが行われた。

ワークショップ7：

人生百年時代のキャリアデザイン

【コーディネーター】

田 中 雅 美

（高知県立大学看護学部 53期生 修士17期生）

【企画の意図】

人生百年時代における新卒看護師は、専門職として長きに渡り社会に貢献していくことにな

る。学生時代から紆余曲折に歩んできた道のりと今後の展望を踏まえ、多様化する時代の中でキャリアをどのようにデザインしていくのかを考えたい。

【話題提供者の紹介及び話題提供内容の概要】

山 下 雄 平 氏

（高知医療センター 62期生）

宮 地 夕里奈 氏

（本山小学校 62期生）

井 上 可 葉 氏

（高知赤十字病院 63期生）

芝 萌 乃 氏

（こうち看護協会訪問看護ステーション 63期生）

西 岡 志 織 氏

（幡多福祉保健所健康障害課 63期生）

卒後3～4年目の話題提供者は、それぞれ看護師、養護教諭、助産師、訪問看護師、保健師として現場で活躍し、視野を広げるために大学院進学という道を選択した方もいた。各々自分の進む道を選択した過程や歩み始めてから直面した困難、やりがい、専門職として成長していくために見出した課題や取り組みについてお話しいただいた。

【ディスカッション内容】

提供された話題の共通点として、専門職として自分が強化していく部分、変わらずに目指している看護について語られ、自己研鑽し続ける努力が大切であることを確認した。また、それぞれの場でキャリアを積んでいく特有の難しさや戸惑いがある中で、職場の先輩や対象者など周囲の人々とのつながりや相互作用によって自分自身の成長が支えられていることを実感し、それらへの還元の思いが自分自身を磨く取り組みにつながっていた。また、多様化する社会の中で専門職としての力を発揮し貢献するためには、他職種や他機関とのつながりや連携が重要になってくることが検討された。そのために、自分の持ち場だけの対応ではなく、フィールドを広げていくこと、周囲を巻き込みながら活用していくことの必要性について共有された。